



## 哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

## 千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤明弘、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

&lt;2022 新年のはじめに&gt;

## 「聞く耳にとどめおくべし &lt;ふざけるな&gt;」

主宰 吉田 千秋

よく知られているように、あのモリトモ問題で、公文書改ざんを指示された近畿財務局職員赤木俊夫さんが自殺した真相を知りたいと、妻の雅子さんが国を訴えていた裁判は、突如終結された。国が賠償金1億700億円に応じる「認諾」をしたからである。

雅子さんは、「お金を払えば済む問題じゃないのです。私は夫がなぜ死ななければならないのかを知りたかった。そのための裁判でしたので、ふざけんって思っています。」と述べました。その賠償金は税金で支払います。「<アベ>守る 税金一億 不正利用」。

雅子さんの腹立ち、怒りが直に伝わってきます。だが、国家権力が司法や検察、警察、官僚を取り込んで不都合な問題を握りつぶし、ないことにする事例はうんとこさある。これに最も近接することでは、桜を観る会前夜の安倍首相後援会の「接待」問題が、無罪放免の判定をされた件。学術会議会員の候補者拒否問題は、「聞く耳」をもたず応答なし。さらに、沖縄の新基地建設反対の何回にもわたる県民の裁定にも応えぬ件。権力というものは昔も今も相変わらず、残虐であり、非情である。

その強大な権力に抗う赤木雅子さんの言動は、多くの人たちに共感を呼び、勇気を与えられた。同じように、権力と結びついた卑怯なセクハラ行為を弾劾した伊藤詩織さん、在日スリランカ人ウィシユマさんが名古屋出入国在留管理局で死亡した問題の真相を追っている家族の人と支援する人たちの言動にも。

でも、このような怒り、不満を言葉にし、あらわにできない人たちがたくさんいる。このコロナ禍の中で、仕事を失い、生活困窮者が急増し、追い詰められて



自殺した人たちも増えている。日々の食料が手に入らず、つながりを絶たれて孤立化し、孤独に耐えられず死に至る人たちとくにこの間、女性と若者が多くなっている。この人たちは、無責任で強権的な政治権力と、惨事まで利用する強欲な資本とによって圧殺されたのだ。この人たちの無念、痛恨を少しでも読み取り、自分にできるかぎりその声を伝えるようにできたらと思う。

そしていま新たに、軍事力を強大にし、敵基地攻撃能力を持つ必要があると主張し、平和憲法を根こそぎ壊そうとする政治勢力が台頭している。戦後長らく平和な国家として尊敬されていた日本を、再び戦争する国にしようということである。絶大な国家権力の前に国民は完全に無力化され、個々人の生活と人生を奪われる暗黒の社会に戻ることに何としてもこの道は歩みたくはない。

第162回哲学カフェ例会(2021,12,9)記録

## 《日本社会を変えたいのか、変えたくないのか?》

「選挙の結果で国民は変えない方を選んだが、実際はそうでもなさそうだ。問題は、声に出ない不満、怒りを明確に取り出して共有できるようにする力、政治力のように思われた。」

### 問題提起 吉田千秋(主宰)

・実は今回のテーマは、政権与党の勝利に終わった総選挙の後ではなく、その前に提起していたものです。結果的には、政権交代が起こるかもしれなかったのに、国民は変えないことを選択した。ほんとうに変えなくてよいのか、という問いも立てて考えていく必要があるようです。

・(以下、大幅に縮小し要点のみ記載)

今の日本社会の政治、経済、教育・文化、メディアのあり方について、国民は多くの不満を持っていると思います。だが、何をどう変えたらいいのかについて明確になっていないのではないかと思います。というより、問題点、争点が明確にならないようにぼやかされ、はぐらかされとも言えます。コロナ禍で国民が疲弊し、大声で改革・変革を叫ぶ元気もなかった要因もあるでしょう。それが今回の選挙にあらわれたのではないのでしょうか。

・大企業と金持ちだけが有利な経済システムと政治政策が行われ、非正規労働者、貧困層、女性など社会的弱者

者がますます困難に陥って問題を放置してよいはずがない。女性差別、人権じゅうりん、民族差別などが許されてよいはずがない。そして、温暖化防止対策や核兵器廃絶禁止条約の世界的なうねりに応じない日本政府に、何も言わなくていいのだろうか。この間の政権の強権的な運営による失策、腐敗をなぜ良しとできるのだろうか…。

・しかし、社会環境・構造、政治経済の様々な変容と蓄積で、60年代から70年代までの国民生活の状況、国民の意識は、今日ではずいぶん変わってきた面もあります。その最たる変化は、労働運動の停滞、学生運動の衰退、教育の政治支配、マスメディアの政府統制による社会運動全体の低下、停滞ではないでしょうか。その結果として、権力・支配に対して抗う声が小さく、低くなり、現状肯定意識も知らず知らず増加してきている面もあるでしょう。

・今日は、そうした背景も念頭に、それぞれいま持っている問題意識を出し合ってもらいたいと思います。

### 意見交流



\* 気になるのは子どもの貧困が常態化していること。これはどうしても変えなければならない現実である。子どもの7人に1人が貧困に直面しているという。教師も気が付かないことが多い。

\* 子どもの貧困を放置してはならない。もっと真剣に取

り組む必要がある。現状では人間一人ひとりに平等の機会が与えられているとは言い難い。

\* 貧困が見えなくなっている。一人一人が孤立している。加えて他人の事に無関心にもなっている。

\* 変えたいと思っても変えられないことがある一方



で、誰かが変えようとしなくても社会は常に変化し続けているとも言える。ソーシャルメディアの拡大がその例で、真偽の定かでない情報や偏った意見を拡散させたり、身元を明かさずに無責任に他人のことを中傷したりできるようになった。これは何とかしないと。

\* 日本には最早必要な変革を行うエネルギーがないのではないか。町内会の防災訓練も惰性でやっているだけの様に見えた。親と一緒に来た子どもたちもしらけていた。学校は午前だけにして、午後、子どもたち好きなことをして過ごせるように支援した方がよい。

\* 教育で考える力を養う必要がある。これまでは予め定まった答えを出すことを重視し過ぎて、学校教育は余りに窮屈な場所となってしまっている。教師も多忙で、イジメや引きこもりの問題の背景になっている。職場でも若い人たちが鬱になっている。社員の人権の尊重が会社の中でしっかり議論されているかは疑問である。

\* 日本での雇用関係は欧米とは異なり、当然の様に従属と忠誠を求められる。公私の区別は曖昧で、会社のために個人を犠牲にする事が求められる。人々はまた会社を通じて世界を見る。多く者は会社の要求を当たり前の様に受け入れているが、こうした事情が過労死など働き過ぎ問題の背景になっている。

\* 会社の中の間人間関係も嫌らしいものとなった。競争が激しくなって、他人を蹴落とそうとする者も現れる様になった。

\* 社会全体で一人ひとりの孤立化が進んでいる様に思われる。自分以外の者に無関心で周りにいる者の姿も目に入らなくなった。

\* 誰もが自分の特徴、個性を自由に発展させられるような環境作りをする。努力をしてみようという気を起こさせることが大事である。

\* 政治家はどれだけ一般国民の事を知っているのか疑問である。選挙は普通の人が出られる様にお金のかからないものにすべきである。

\* 女性が社会全体の半数を占めているのに、選挙に出る女性の数は限られている。女性の政界進出を促す様な環境整備が必要である。法律で一定の割合の女性候補を立てることを義務付けることが必要かもしれない。女性議員が増えれば政治も変わると思う。

\* 女性議員ならではのテーマがある。コロナ禍で生理用具が手に入りにくくなって、女性が生きにくい状態が生まれた。男性議員ではこの問題の重要性が分からない。

\* 地域の集まりは昔の村社会的な家父長制の慣習を引き継いでやっている。自治会ないし町内会では女性の副会長があっても、会長は男と決っている。男女平等の理念が身近な所で無視されている。

\* 家庭を持つ女性の大変さを男は分かっていない。子育てを含め家事は女の仕事で、老いた親の面倒を見たりすることも、たいてい女の仕事と見なされる。このような条件で、女性が自分のキャリアを考える何て事は夢物語である。

\* 先ずソーシャルメディアにおけるくだらない情報の垂れ流しは止めて欲しい。マスコミの姿勢も問題である。雑誌やテレビのバラエティー番組も芸能人や著名人の私生活を暴露する興味本位の情報が多過ぎる。

\* 女性が男性社会の中で評価されようとする余り、物事の判断において男性に合わせて、女性の視点を放棄してしまうなら、好ましい発展とは言いかねる。男性の様に考える女性議員が増えても、政治は変わらない。

\* 他人が変わることを期待するなら、先ず自分自身が変わる必要がある。どんなに頑張っても他人を変えることは困難だが、自分を変えることはできる。

\* 変えてはならない第一は憲法9条だ。改憲勢力が国会で3分の2を越える議席を獲得している。今後改正の動きが強まるだろう。改正が現実に行われるかもしれない。しかしたとえ改正されても、連帯して反撃する覚悟でいる。今後も声を上げて行きたい。



挿し絵(長かのこ作)

## 意見交流の最後に 吉田 千秋

いま私たちの前には、変えたいこと、変えたくないこと、大小様々の問題が存在しています。どれから手を付けるべきなのか分からず、途方に暮れてしまいそうにもなります。問題ばかりで私たちの文明は没落するしかないと考える人もいるかもしれません。この100年余りの歴史もジグザグえ、悲惨な2度の世界大戦後にも、さらに米ソ対立の冷戦時代があり、それが終わってもさまざまな紛争が絶えません。

•そしていま、人類は気候変動という地球環境の危機に直面しています。温暖化を抑制できなければ、多くの人間の生存が脅かされるでしょう。世界の国々がしっかり

話し合っ、本気で一緒に取り組む以外に解決の道は開かれませんが、核戦争の脅威もなくなっています。課題は沢山あります。

•人間の心が貧しくなっている様に思わせる出来事も後を絶ちません。自分のことで精一杯で他人の苦痛が目に入らなくなっています。他人の問題に背を向けずに心がける必要があります。敵になって対立するのではなく、同胞として大らかに生きてゆきたいものです。個人で出来ることには限界があります。でもできる範囲でするようにするだけでも、社会を少し良い方向に変えることができるはずで

## ＜前号感想、例会感想、意見、便りなど＞

## ○＜通信161号を読んで＞

衆院選挙の結果についての吉田先生の冒頭の言、私も同じように思いました。毎日新聞の「書齋のつぶやき」で、作家の中村文則氏が今回の野党共闘についていろいろ感想を述べておられたが、それにも私は同感を覚えました。野党の選挙協力がうまくいった多くの所で、当選ギリギリのところまで与党を追い上げていたと。(もっと早くから取り組んでいたら違っていたでしょう！)

選挙の時だけの選挙戦術的な“野党共闘”でなく、日常的に具体的な様々な国民の要求で共に闘っていくことが、本当は大事なのではないのでしょうか。岸田氏は「国民の声を聞く」と言っていますが、野党こそ、岸田氏以上に「みんなの声」を聞いて欲しい。自分たちの主義主張を言うだけでなく、具体的な要求を共同の政策にして、訴えてほしいです。

先の中村氏は「格差是正で野党は団結すべきで、そうでないともう、日本の貧困層は耐えられない」と言っておられました。(あ)

## ○＜やはり変えなくっちゃー！＞

「日本社会を変えたいのか、変えたくないのか？」これは永遠のテーマでなかろうか。直感的には、今の日本社会は何かおかしいと思うのであるが、余命幾ばくもないわが身を思うとあくせくしても仕方がないとも思う昨今である。自分の身近な生活環境だけを見たら、平穏無事の毎日をありがたいとは思うもので、特に何



挿し絵(長かのこ作)

も変わらなくてもよいという、独善的な心境に陥る。

そんな独善は世の中の事件や自然災害に巻き込まれようものなら、独りよがりの安全・安心・平穏の日常生活は吹っ飛んでしまう。他人の不幸は、自分の不幸としてとらえていく視点が、社会変革の原動力ではないかと思う。「変わらなくっちゃー！」(MS)

## ○＜ほんとうに困っている人に救いの手を＞

今国家、補正予算35兆9千円と何がしか、可決・成立。不足分は国債で。“無い袖は振れぬ”ではなく“無い袖も振る”ツケは次世代に。4・50歳世代の年金受給が危ぶ



まれている。随分と不安感が高まっているように感じる。「年寄り早く死ねば！」なんてことにも。

コロナ対策給付金、前は各個人に10万円給付された。今回は18歳未満に、いずれも本当に困っている人にきちんと届くのか全く怪しい！ 我々年金受給者世帯はちょっと違うのでは。しかし、返すなんて言わず、もらえるものはもらおう、精神だ。

本当に困っている人が見えません。このジレンマはどこから来ているのか。{隣の人は、何する人ぞ}と言われるようになって、幾年。私の子供のころは、みんなで助け合って生活していたように記憶している。高度経済成長の落とし子か？ (hira sumi)

### 〇＜権力を失う恐怖と総選挙＞

総選挙で野党共闘が敗れ、野党共闘失敗論がかまびすしい。選挙結果の数字を丹念に見れば、小選挙区では立憲民主党が9議席増、自民党は28議席減、そして自民党大物議員二人の落選、与・野党で僅差の勝敗を分け合った選挙区が60と、野党共闘がなければ生まれない結果をしっかりと残した。

しかし、比例選挙で野党が後退し全体では自民が権力を確保した。この結果を生み出した背景のひとつに、自民党の「権力を失う恐怖」があったのではないか。さらに、政権に憲政史上初めて共産党が絡むという恐怖はどれほど大きかったのか。選挙前からメディアを使い、「共産党は暴力革命を捨てていない」というデマを流し、選挙に入ると「今回の選挙は自由民主主義の政権か、共産主義の政権かの争い」「立憲民主党は立憲共産党」と叫んだ。

確かにこの恐怖からくる、なりふり構わない選挙戦術は一定の成果を生んだ。しかし、恐怖は払拭されたわけではない。だから、野党共闘失敗論を振りまくのだ。新年の7月には参院選が待ち受ける。私たちは落胆する暇はない。(各務原・三戸)

### 〇＜近代的個人と自己責任＞

私の中で“民主主義”が意識に上った10代後半だった。その後の認識追加も含め今に至って整理すると次の如し。

近世、西ヨーロッパで初期の資本家がカトリック、王権の支配に対して、思想、科学、政治の分野で厳しく闘い、近代的知性と民主主義的精神を固めてきた。20世紀に入り、戦争の禁止や生活権(=社会権)が付加された。その内容はほぼ日本国憲法に取り込まれている。新側面



挿し絵(長かのこ作)

の人権意識が現れて進歩する民主主義の様相を示している。

ところで“近代的個人の意識”や“自己の確立”を、封建制または封建的社会意識の中で努力して獲得し、近ごろでは誰もが普通に持っている心境となっている。人間生活に意を介さぬ資本の活動により、生活を破壊するほどの経済的落差が生じ、“親ガチャ”と言われるような経済落差と共に、文化的落差も生じている。社会的に生じてきた封建時代とは違う落差に対して大局的に改善して行こうとすることが“自己責任”の否定のようだ。(アダム・スミス)

### 〇＜連帯の輪を広げる道筋を＞

♪ 戦争が終わって、僕らは生まれた。戦争を知らずに僕らは育った…♪ 70代や60代なら誰でも歌ったあのフォークソングは、自分たちは戦後世代だけど、親たちの戦争体験は「自分ごと」だとのメッセージが込められた『平和のうた』だった。そして、憲法9条とともにあったように思える。長い経済成長が新憲法の体制を定着させ、日本周辺での戦争や様々な社会問題があっても、憲法を活かす方向で人々は物事を考えた。

ところが、90年代に入って経済成長は止まり、政治も不安定化し、就職氷河時代に入ると若者は突如食い扶持の確保に汲々と始めた。やがて非正規雇用も広がり、安定した就職先確保のために、卒業の前から長い期間就活に励まなければならなくなった。この若者の「自分のことに精一杯」状態が30年余も続き、自分と親しい友達や家族ぐらいしか視野に入らない保身術が50代以降

の世代に広がった。社会に関する意識の世代間分断だ。戦争は「自分ごと」ではないと感じる若者が増えるとともに、あの歌は年配世代のナツメロになった。「日本会議」などの自民党の保守右派は、この分断の拡大を待っていたかのように憲法改正を喧伝し、体制をゆさぶり始めた。そして、社会全体の保守化ともあいまって、今や改憲の「一歩手前」まで来てしまった。一方、人類全体の生存を根底から脅かす地球環境問題なども喫緊の課題となってきた。世代が違って避けて通れないグローバルな危機は、平和や格差の問題とも重なる。課題に目をそらさず、解決に向かって世代を超えた連帯の道筋を編み出さない限り、前には進めない。平和の恩恵を、わが世代で終わらせるわけにはいかない。(フィリピン・ウオッチャー)



### 〇＜2020年代の教育を考える＞

東日本大震災に始まった2010年代。2020年代はさらに、前年からのコロナ(covid-19)禍を引きずりながら始まった。コロナ禍が学校に限らず、教育にもたらしたのは、学びと生活の場の「シャットアウト」だった。記憶に新しい全国一斉休校にオンライン授業、社会教育施設も長らく休館となったところが少なくない。ここ数年で、学校統廃合や公共施設の再編で、学びに出かける場所は絶対的に減少している。

教育や学びは、生活から分離したのではなく、生活に根ざしたものであることは、各人の経験に照らしても明らかである。学校も本来は、勉強だけでなく、友達や教師とのかかわりのなかから多くを学ぶ場であるはずだ。個別に最適化された教育とは、一人で黙々と、どこか遠くにある「社会」に出たり、何かに従うための準備ではなく、学校や地域という生活社会で暮らすなかで、それぞれのセンスとペースが伸びていくように構想される必要があるだろう。

(山沢智樹・東北生活文化大学)

### 〇＜新年の抱負＞

新年はもっと絵を描こう。いや絵でなくてもいい。文

を書いたり話したり。それは、私自身を鏡に移すこと。自分と向き合う時間。

新年はもっと多くの人と話をしよう。生きている人と、死んだ人と。それは自分の未熟をかみしめながら、次の一歩を踏み出すこと。

新年はもっと旅をしたい。見知らぬ土地を歩くもよし。想像力の翼を借りるもよし。守るものと抗うものをしっかり見つめたい。

そして人であることを喜びたい。あなたと共に歩めることを喜びたい。(かこちゃん)

### 〇＜日本の衰退、劣化が背景に…＞

日本社会を変えたいのか、変えたくないかと問えば、いまの日本社会でいいポジションにいる少数の人々は変えたくないだろうし、現状に何らかの不満を持っている大多数の人々にしても、変えるエネルギーや元気がないというのが現実だと思います。原因はここでは書きませんが、日本の衰退、劣化ぶりはひどいと思います。いま渋沢栄一を描いたドラマが放送されているみたいです。それで思ったのですが、渋沢栄一が設立した第一銀行はいまみずほ銀行ですから、今のみずほ銀行の惨状は、近代日本を駆動していたシステムが終わったなみたいな空気を象徴している気がしました。

(たなか)

### 〇「事実上の外交ボイコット」

政府は24日、北京冬季五輪に政府関係者を派遣しないことを表明した。米国と足並みをそろえた事実上の「外交ボイコット」だが中国にも配慮して「総合的判断」を強調し、米中双方の顔を立たせたがこれでよいのか？

「スポーツを政治問題にするべきではない」の観点から、米国にひたすら追従する岸田政権の姿勢は問題である。今後もこのような姿勢では「台湾有事」への対応も懸念され、最大の貿易相手国の隣国への対応ではない。

もともと、1972年の日中共同声明では「日本国政府及び中華人民共和国政府は、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干渉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に両国間の恒久的な平和友好関係を確立することに合意する」とあり、この点を配慮すべきだ。

スポーツは政治的干渉から守られなければならない、フランスはボイコットしないと表明しており、さすがフランスらしい。特に、今回の表明を急がせたのが安倍元首相であることは、岸田政権の危険信号である。(井口)



### ＜大阪だより その1＞ 「司法修習生（岐阜）から弁護士（大阪）へ」

こんにちは、大阪の弁護士の宮本亜紀です。「哲学カフェdeぎふ」には、約11年前に半年間ほど参加させていただきました。当時私は、司法試験に合格した後、裁判官・検察官・弁護士（法曹）のいずれかになるために1年余り研修を義務付けられる司法修習生でした。京都で生まれ育ちましたが、最高裁により岐阜に配属決定され、柳ヶ瀬商店街近くに10ヶ月間住み、岐阜地裁・岐阜地検・岐阜弁護士会の弁護士の事務所に各々通っていました。

将来不安の勉強漬けから晴れて司法試験に合格し、憧れの法曹実務に携わるといふ毎日がドキドキの青春時代でした。なので、何でも挑戦的に身に付けてやろうと、夜や休日には金華山に体力作り登山や、鶺鴒の屋形船で飲んだりしながら、哲学カフェにも出掛けて、皆さんと聞くのも話すのも楽しみました。今でも弁護士業がちょっと辛くなった時、岐阜の町並みと哲学カフェを

思い出します。

そして、私が大阪の弁護士になる直前に、大阪維新の会の橋下徹市長と松井一郎府知事がダブル選挙で圧勝していました。市長が「民意（＝僕）を無視する者は去れ！」と市職員を敵視して、公務員叩きが荒れ狂い、私は新人弁護士として、市職員の組合事務所を市庁舎から追い出したのを取り消す裁判、続いて市長が業務命令で「特定の政治家を応援する活動に参加したか、誘ったのは誰か」等を回答させる思想調査アンケート裁判の弁護団に入り、毎日夜遅くまで仕事を始めることになりました。

（宮本亜紀）



### ＜京都だより その8＞ 「京都の米軍基地」

日本海に面した丹後半島。ここは、付け根には天橋立、さらに東に高浜原発・大飯(材イ)原発が位置します。西には城崎(キノヅ)温泉、蟹がおいしい間人(タヅ)温泉もあります。

丹後天橋立大江山国定公園の一部でもあり風光明媚な観光地なのですが、この半島の先に米軍のXバンドレーダー基地(経ヶ岬(キョウガミヅ)通信所(自衛隊経ヶ岬分屯所の隣))が造られ、2014年から運用されています。11月に参加した集会では「アメリカのミサイル防衛システムの一環として造られたもので、中国・北朝鮮を仮想敵とし、アメリカに向けたミサイルが発射されたら、それを探知・追尾・撃墜するのに必要な情報を得るアメリカを守るためのもの」と説明がされました。この基地が「攻撃されることはない」(近畿中部防衛局の説明)ということですが、基地警護訓練は年々規模が大きくなっているとのこと。京丹後市議会の永井議員からは、日々の基地の監視活動の報告がありました。

この基地が中国・北朝鮮に対するものであれば、有事に際しては攻撃の障害となるレーダー基地を叩こうとするでしょうし、そのために飛んでくるミサイルは確実に迎撃できるのか。京都府・京丹後市は、「住民の安全・安心の確保は国が約束してくれた」と言ったとのことで

すが、根拠は「国が約束したから」でよいのか。

話は変わりますが、集会後のデモには多くの警察・機動隊が出動して来ました。右翼団体の街宣車が4～5台出てきて思い切り罵声を浴びせられたのですが、警察・機動隊は、揉め事を防ごうというものだったようです。「テロ集団」とか「日本から出て行け」等常套句の繰り返しが静かな街に響き渡る騒ぎでした。考えが合わないから「出て行け」はまだ分かるとしても、根拠がないはずなのになぜあんなに憎々しげに確信的に「テロ集団」と怒鳴れるのか。休日にわざわざ車を出し多くの「同志」を動員できるのか。動かすもの(情念)がなければあんなに活発に動けないだろうに。最近観た『三島由紀夫 vs. 東大全共闘』(2020年/1969年5月の討論集会の記録映画)で三島が語った右翼としての確信や思いの一部納得をしかけながら考えさせられました。

（hiro）



## ＜世界一周貧乏旅 その28＞ 「共存とクリスマス」

ロンドンのクリスマス当日。住んでいた南部のブリクストン駅の正面入り口に来てみると、いつもは大勢の人間が駆け下りる大きな階段の前に、目が痛くなるような真っ青のシャッターが引かれていた。太い鎖に南京錠で鍵をかけられた物々しい入り口は、クリスマスに電車なんか走らないうらさるだろうと、こんな日にわざわざ駅を見に来た僕を無言で叱っているような気がした。

恐らくみな帰省したり国へ帰ったり、自分の家族と過ごしているのだろう。街は人通りが少なく、日本のクリスマスのようなきらびやかな雰囲気はなく、どちらかというと伝統的な日本の正月のような、静かで儼かな日という印象を受けた。

人気のない街にも飽きて住んでいるシェアフラットへのそのそと帰り道を歩いていると、いつも通りすぎたジャマイカ料理のファストフード店の前に、「Food For The Homeless」と書かれた看板が置いてあった。読んでみるとどうやら、ホームレスのみなさん食料を無料で提供しますよ、ということらしかった。

キリスト教の文化圏では、クリスマスの幸せをおすそ分けするというような文化があり、それは様々な形でホームレスを支援をするという取り組みになっているようだった。主にそれは食べ物に分け与えるということが多く、この日なぜか僕も食パンとバナナをもらった(余ったんだと言われた気がする)。僕がアジア人のホームレスとして認知されたのかどうかはひとまず置いておいて、クリスマスの日に利益を度外視して、弱者の救済と利他的な行動を起こす日として取り組んで

いるのは美しいと感じる。それはお金と経済を回すことよりも、人の命の存続が最優先とされることに人間の共存と繁栄の精神を感じるからだと思う。

その行動が自体がホームレス達にとって良いのか悪いのか僕にはわからないが、少なくとも打算のない信念と意思があると思える。でももしかすると、そういったホームレスへの慈悲の取り組みそのものが、イメージアップや長期的な集客が見込めるといった営利的な画策も考えられなくもない。慈善ビジネスという言葉が頭を過ぎる。

最近、人のことなんてこれっぽちもわからないんだなと思う。たとえ心理学を学ぼうとも、目の前の人間が何を考えていて何を企んでいるのかなんて、さっぱりわからないのだ。慈善活動をする人間は心が綺麗で、犯罪を犯す人間は腐った心を持っているのだろうか。いずれも、人の観察から得られることなんて「いい人」「わるい人」程度の主観に凝り固まった曖昧なものである。

ただ一つ、僕の凝り固まった主観の、ただの感想に過ぎないことをここで書き落とすとしたら、そのジャマイカ料理店で食べ物を手渡す店主の顔は、どちらかというと慈しみを感じさせるような、素朴な笑顔をしていたと僕は思った。

(カモノハシタニ)



### ＜この一本＞ アレクサンダー・ナナウ監督『コレクティブ 国家の嘘』

2019年制作、ルーマニア、ルクセンブルク、ドイツ合作。2021, 10 日本上映。

この映画の舞台はルーマニアである。2015年10月、首都ブカレストのクラブ“コレクティブ”でライブ中に、27名の死者と180名の負傷者を出す大惨事の火災が起きた。だが、一命を取り留めたはずの入院患者が次々に死亡し、最終的には64名まで膨れ上がってしまう。

映画は、これに不審を抱き調査を始めたスポーツ紙「ガゼタ・スポルトウリロル」の編集長を追ったドキュメンタリーである。彼は内部告発者からの情報提供により衝

撃の事実に行き着く。製薬会社が消毒液を半分に薄めて莫大な利益を得て、それが原因で火傷が放置され多数の死者を出していたのだ。しかも、この会社と病院経営者、さらに政府関係者が癒着していたのである。

編集長をはじめとする記者たちは、命の危険も迫る中、この真実に迫っていき、発表し続ける。その報道を目にした市民たちは呼応し、怒りは頂点に達して内閣はついに辞職へと追いやられる。その結果、正義感あふれる



若い保健省大臣が生まれる。彼は、腐敗にまみれたシステムを変えようと執務室も開放し、薬品の検査、医療・病院経営の明瞭化など、次々に改革の手を打って奮闘する。しかし、結果的には次の選挙で保守派が勝利を治め、元にもどってしまう。

結末はハッピーエンドではないが、真実を明らかにするために権力の腐敗に抗い、敢然と闘う人たちの勇氣に心から感動した。それは、ここで描かれた事実にもとづく遠い国の記録が、近年日本に生じている政治・権力の腐敗、数々の「国家の嘘」に重なって映し出されている

ように思えるからである。

かの国でのこうした抗いの経験は必ずや実る時期がやってくるであろう。わが日本でもそうあらんことを。

(sensyu)



<この一冊> 堤 未果 著 『デジタルファシズム：日本の資産と主権が消える』

NHK出版新書、2021年

この本には 日本の資産と主権が消えるというきわめて刺激的なサブタイトルが付いているが、デジタル人間ではない者にもわかる事例がいくつか提示されていて、現在の日本がかつてない危機的状況にあるという堤氏の問題意識が十分に納得できた。

デジタル化とはすべてのデータを数値化し、全世界を網羅するほどの膨大な情報の蓄積を可能にすることである。今日のような競争社会では情報をいち早く大量にキャッチすることが生き残るための必須の条件とされ、世界的規模で熾烈な争いが繰り広げられている。ところが、コロナ禍のなかではからずも明らかになったのは、日本がこの点では他国の後塵を拝しているということであった。かくして菅政権下で進められたのが、デジタル庁の設置であり、そしてオンラインシステムの

構築だ、キャッシュレス化だ、デジタル化だ…

便利になるんだっいたらいいんじゃない、などとのんきに構えてはいけないうのが、堤氏の警告である。デジタル庁はやがては政府をしのぐ権力を握るようになり、それだけではなく、セキュリティ対策が不十分な日本はいつの間にか他国の餌食とされて、わずかな資産も主権さえも奪われることになりかねない、というのである。スマホ好きの人にもぜひ一読を勧めたい。



<埋め草> ちょっと紙面が空いてしまったので…

こういうのを「埋め草」というのでしょうか。ポツンと空いてしまった紙面を埋める小さな原稿です。

かと言って、お伝えできるような楽しい話題はなく、暗澹たる思いにさせてしまうのかもしれませんが。

年末、年始にかけて、私のところには、いろいろな困難を抱えた方からのSOSが入りました。感じたことは、8050問題がいよいよ切羽詰まった状況になってきたということです。8050問題というのをご存知でしょうか？ 80代の親と50代の子どもが、親の年金を頼りに生活している状態を言います。仕事もなく、ひきこもりながらとか、親の介護のために仕事をやめたとか、親亡き後の深刻な問題もありました。

もう少し若い世代からは、「働く」「仕事」をキーワードに、「このままじゃ、いけない」という思いで働きだした

女性や「仕事を選ばない」「甘たれるな」という声に働けなかった女性は「自分のためじゃなく、『社会の犠牲になって』働かなくてはいけないと思ってしまう」という声、元日には『私は再就職活動が失敗したらもう自殺することを考えています。働けなかったら『意味ないし』、私は自分自身や自分の人生に価値を見出せなく、不要な人間だと思ってしまう』というメールが届きました。28歳の中学3年生の担任をしているという女性は、3月で退職すると年明け早々に話してくれました。

私たち年配者は、次の世代にこんな社会を残してきたことすら気づかずにいます。彼ら、彼女らに私たち年配者はどんな言葉で語りかけたらいいのでしょうか？ 哲学カフェでも若い世代に語り掛ける言葉をみんなで探れたらいいなと思います。(中川)

## 哲学カフェ 第27期(2022年前半)例会予定

\* 毎月第2木曜日、午後7:00~9:00 ふれあいスペース

⇒ コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

|                     |  |
|---------------------|--|
| 第163回例会<br>1月13日(木) | <b>「世の中を明るくするには何が必要か？」</b><br>* コロナ禍2年。慣れるどころか、第6波も心配で、疲れだけが蓄積するこの頃。<br>* 気候危機、核兵器問題、加えて改憲勢力の台頭。希望をどこに見出すのか。<br>⇒ 新年会はできませんが、明るい顔で新年を迎えましょう。 |
| 第164回例会<br>2月10日(木) | <b>「日本は民主主義国家なのですか？」</b><br>* バイデン大統領主催の「民主主義サミット」に、中国は反発。日本はもちろん参加。<br>* でも、「わが政府一党独裁似たような」状況あり。民主主義と専制、あやしい区別。                             |
| 第165回例会<br>3月10日(木) | <b>「しのびよる老い、それにどう向き合うのか？」</b><br>* 日本は言わずと知れた高齢社会。健康年令も世界一。政治も経済も老人王国。<br>* だが、老人当人の多くはたくさん心配を持っている。どう終活していくのか。                              |
| 第166回例会<br>4月14日(木) | <b>「天皇制・皇室のいま、これからどうするの？」</b><br>* 昨年メディアがむやみに取り上げた眞子さん結婚問題。放っておいたら良いのに。<br>* 肝心の女性天皇や女性宮家の問題については、まともや放置。どうするのかね。                           |
| 第167回例会<br>5月12日(木) | → 希望テーマお寄せ下さい。   |
| 第168回例会<br>6月9日(木)  | 同上   |
| 第169回例会<br>7月10日(日) | 同上<br>→ 創立14周年記念行事を3年ぶりに開催めざします。   |

**哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。**

**口座記号・口座番号 00810 1 142912**

**加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫**

**「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!**

**<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>**

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願ひます。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



★コロナ禍で中断されていた国際交流協会のイベントが2年振りで開かれ、在日フィリピン人などの親子20人余が集った。この催しには4人のボランティアが参加し、私もその一人として子どもたちに遊びを紹介する役割を担った。

★この時、他の3人は20代の若者で、一人の男性も含まれていた。今までこういう場には女子の参加が多かったので、彼に注目した。ことにその若者は、今どきのメンズファッション誌から抜け出たような装いだったから、余計だった。

★私たちは、子どもたちに、ケン玉・達磨落としなどにトライするよう促し一緒に楽しん

だ。その中、当の彼は遊びにはさほど熟達していなかったが、すぐに子どもに溶け込んでいった。ことに、時折タガログ語を使って言葉の壁を越えようとしていたことが目を引いた。

★後で少し分かったことだが、マニラやセブでのボランティア経験があり、しかもどこかの団体に属すのではなく、個人的な行動だ、という。

(大橋健司)